永劫の悪夢

—*Absalom*, *Absalom!* における制度解体のプログラム—

森　　有　　礼

I

William Faulkner の *Absalom, Absalom!* は，アメリカ南部に住む白人一家である Sutpen 家の繁栄と没落の歴史をその物語の基軸としている。この物語はそれを語る語り手達の語り (storytelling) の過程そのものを通じて (Parker 10)，あるいは彼らとその聞き手との対話 (interplay) を通じて構築されるものである (Lockyer 62)。そしてこの語りが拠って立つ基盤は，Radloff の言葉を借りればアメリカ南部社会の持つ遺産 (heritage) であり，物語において絶対的優位性を持つこの遺産がこの作品をいわゆる "the Sutpen saga" たらしめている (261-62) と考えられてきた。つまり，この物語を語る，あるいは構築してゆく言葉は，語り手達が属する社会の遺産，あるいは伝統によって裏打ちされているというのが *Absalom, Absalom!* に対する従来の批評態度のひとつであった。

だが我々がこの小説を通読した時，物語において我々が所与のものと見做しているこの南部の遺産の正統性についてある種の疑問を抱かざるを得ない。というのは，第一にこの遺産がそのよるべき正当な起源を欠いているという点において，また第二に，それが標榜する社会制度は常にそれが有利に働く側，つまり南部白人を正当化する論理からなり，それと対立関係にあろうとする者達を己が論理の外へと排斥しているという点において，それが南部社会にとって本質的なものであるというよりは，むしろそれが自らを規定するために捏造したある種の虚偽性 (fakeness) の証佐のように見えるからである。しかもこの南部性なるイデオロギーは，物語全編を通じて常に自らの外側に位置する者達の持つ圧力ー一つには彼等が行使する実際的な力，もう一つはこの物語を構成する際の彼等の語りそのものーによって脅かされ続けている[1]。この圧力は一見南部社会では無視されているかのごとく見えつつ，時にその沈黙の威力によって，また時にその言葉の持つ修辞的威力によって南部性のよって立つ基盤としての南部の社会制度を弱体化せしめるのである。この両者の対立の中に物語を読み込むことによって，南部の歴史を語る作品としての *Absalom, Absalom!* の中に，その歴史を支える社会制度の虚偽性を暴き出す語りの機能を見出すのが，本論の目的である。その結論は，南北戦争以前から南部社会を支え続けてきたイデオロギーの解体に到達するであろう。まずは，物語内にあって南部社会

を支える南部性がなぜ問題化されるべきかを考察することから始めよう。

II

*Absalom, Absalom!*がSutpen家の盛衰の物語であるならば，それは後に一家の長となる若きThomas Sutpenの登場から始まると言ってよいだろう。彼は1833年の6月のある日曜の朝，物語の舞台である南部の町Jeffersonに現れる。その際にこの町にとってのsrangerとして認識される彼の氏素性は，以下に見られるように不詳となっている。

> ... and there the stranger was. He was already halfway across the square when they [people in Jefferson] saw him, on a big hard-ridden roan horse, ... face and horse that none of them had ever seen before, name that none of them had ever heard, and origin and purpose which some of them were never to learn. (23-24)

Sutpenは町の人間と殆ど打ち解けようとはせず，Jeffersonの郊外のChocktaw Indianの土地を手に入れ，彼が連れて来た黒人奴隷と共にSutpen's Hundredと呼ばれる大荘園を構える。だが，物語の後半部の語り手となるQuentinの父であるCompson氏によれば，この黒人奴隷達は英語を解さず，それゆえSutpenと彼等との会話は“a sort of French”や“some dark and fatal tongue of their own”(27)によって交わされる。言葉が意思疎通を通じて他者を馴致する機能を持つのなら，Jeffersonとは異なった言語が交わされるSutpenの地所や，そこに住むSutpen達は，その埒外にある存在なのだ。同時にTobinが指摘するように，この荘園は当時のJeffersonから時間的にも遠隔化された“out of time”な場でもある(81)。

屋敷を完成した後，SutpenはJeffersonの白人の商家の娘であるEllen Coldfieldと結婚し，彼女との間に一男一女を設ける。だが，Ellenの妹であるRosaによれば，この結婚は以下に示すようにSutpen自身の自己保身を目的としたものでしかない。

> He [Sutpen] sought the guarantee of reputable men to barricade him from the other and later strangers who might come seeking him in turn, and Jefferson gave him that. Then he needed respectability, the shield of a virtuous woman, to make his position impregnable even against the men who had given him protection on that inevitable day and hour when even they must rise against him in scorn and horror and outrage; and it was mine and Ellen's father who gave him that. (9)

Rosaによれば，SutpenのEllenとの結婚の目的は，彼がそれによってJeffersonにおける社会的地位(respectability)を確立することでしかない。だが彼にとってこの社会的地位は，彼が抱き続けてきたある計画(design)を達成するためには不可欠な要素なのだ。その計画とは，Sutpen家を自分を始祖とする白人純血種の家系として繁栄させることである。そして彼がこのような計画を抱くに至った経緯というのは次のようなものである。

事の発端は，少年であったSutpenがまだWest Virginiaの山中に家族と共に暮らしていたある日，ある富裕な白人の家を訪ねた際に，その家の黒人召使から「表戸から入ることを厳しく禁じられ，裏口へ回れ」(188)と指示された出来事である。このときSutpenは14歳であったのだが，Compson氏によれば，彼はこの屈辱的な事件を通じて初めて，差別という形で人間のあいだに存在する差異の実態の刻印を受けたのである。

今「差別」という表現を用いたが，このときSutpenの受けた差別はアメリカ社会におけるいわゆる人種間のそれというよりはむしろ，貧富の差に根差すものである。もちろんSutpenは無意識にこの事実を察知している。だが，問題は彼がこの差別構造を，人種間におけるそれを二重焼きにして認識したことである。黒人召使に追い立てられた後，自分のなすべきことを自問する中で，以下に窺えるように彼はそれが一種の復讐であり，しかもそれはある特定の対象にではなく，普遍化された黒人という存在に対して向けられるべきであると考えるに至る。"... and when it [Sutpen's innocence] said *them* in place of *he* or *him,* it meant more than all the human puny mortals ..." (192)

このように「*him*（Sutpenを追い返した黒人）の代わりに*them*（黒人種全般）を据える」ことで，Sutpenの復讐の念は黒人全般へと転移され，さらにそれは個々の黒人から抽象的集合体としての黒人に置換される。この時彼は以下のように自分の達成すべき目標を悟る。"So to combat them you have got to have what they have that made them do what he did. You got to have land and niggers and a fine house to combat them with." (192)

これこそがSutpenの描いた計画であり，それは自らを始祖とする"respectable"な白人純血種の家系を築き，黒人に対する絶対的優位を実際的に確立することで完遂されるべきものである。それゆえこの計画を実現すべく彼は故郷を捨て，西インド諸島のHaitiへ，さらにはJefferson へと放浪するのである。ここでKuykが指摘するように，彼の中にある反黒人感情は基本的に彼自身の個人的経験に根差すものであり，またその基盤となっているのは主として貧富の格差によるものであって，それを具現化したのはたまたま黒人であるにせよ，その背後にはこの黒人達を統べる白人のdynastyが存在することも確認しておきたい(17)。だが一度この黒人との対立の図式が描かれた以上，物語内におけるSutpenと黒人との闘いは常に人種間の闘争として顕在化することとなる。そしてこの闘争においてSutpenを有利な立場へと導くのは，このJeffersonの持つ社会制度なのだ。

*Absalom, Absalom!*において，Jeffersonという町はアメリカ南部社会の表象と言える。そこは人種差別が制度として確立され，その共同体の伝統（tradition）としてその社会構造に内在化されている場であり，しかもそれはこの社会において支配的立場にある白人達によって是認されている。寺沢が言うように，この社会において白人であることは先験的に善なる正しき存在であって，逆に黒人である者にはその正しき社会規範を侵す悪としての役割を予め付与されている。そして，そこに参入する者はその人種的特質に従って否応なくこの社会構造による規

定を受ける[2]。Jefferson にとって stranger である Sutpen ももちろん例外ではないが，この制度自体が，彼が黒人というものに対して展開してきた闘いを支持する機能を果たすこととなる。Jefferson の社会に参入した Sutpen は，そこで地所と家族を手に入れることによって「支配階級たる白人」としての社会的地位を獲得するが，そのように規定されることで彼はその社会において非支配的立場に甘んじている黒人種に対して絶対的優位を手に入れる。この意味においては，Jefferson における Sutpen's Hundred の繁栄は予め約束されていたのである。

ここまで見た限りでは，Sutpen は Jefferson の差別的社会構造を言わば借り受ける形で成功を収めたかに見える。だが歴史が実際に証明している様に，この黒人差別という制度は敗北するべき運命にあり，それに従って物語中で彼もまた滅びゆくことになる。その訳を南北戦争に帰することは簡単だが，ここではこの制度自体が内包する問題にその理由を見出したい。

今ここで少年 Sutpen を追い返した黒人召使が彼に対して持つ優位性が，その主人の富によっていたことをで思い起こしてみよう。この黒人召使は彼自身で Sutpen に対する優位性を保証するものは何も持たず，ただその主人の代弁者として，主人に属する権力を代替的に行使しているに過ぎない。この場合，この召使の Sutpen に対する優位性は，本来彼自身に属さない貧富の構造を借り受け，その中に自らと Sutpen を嵌め込むことで偽装されているに過ぎない。そして Jefferson における Sutpen の成功も，同様の偽装の上に成立しているのだ。

確認すれば，Sutpen の Jefferson における社会的地位は，荘園と由緒正しき妻によって手に入れたものであって，この町の他の白人のようにいわば生得的に享受し得る類のものではない。実際，stranger と見做されている彼は，常に共同体にとって異質な存在であり続ける。そしてこの異質さは共同体にとって必然的に敵対するものとして認識される。例えば，Rosa はしばしば彼を悪鬼（orge）と呼び，Colifield 一族に滅びをもたらす存在と見做している。同様に Jefferson の白人達，ひいてはその共同体全体が彼を敵視してゆくこととなるが，その裏にはこの共同体が彼に対して抱く恐怖が窺える。Pearce はその理由を次のように述べている。

> Sutpen is a barbarian, a threat to the religion, manners, family, and destiny of the Southern white race. He is a threat because he embodies the urges repressed by decorous manners, religious formalities, and the institution of the family in its public manifestation . . . (116)

ひと言で言えば，Sutpen の脅威とは白人社会を構成する制度そのものに対する脅威であり，それゆえ彼に体現される悪とはこの制度を崩壊させんとする破壊的（subversite）な要素に他ならない。彼は基本的に共同体に対する他者であり，それゆえそこに参入してはならない存在なのである。この点において Sutpen は同じくこの共同体から排斥された存在であり，彼の仇敵でもある黒人達に極めて近い役割を付与されている。そして彼等が一度その境界を越えて制度内に侵入するとき，彼等は白人達の社会を保障する正統性（genealogy）を脅かす存在となるのだ。この意味において Sutpen は極めて両義的な立場にある。彼は黒人種に対する優位を獲得す

るために白人社会である Jefferson の社会制度に参入せざるを得ないのだが，他方その共同体自体から潜在的脅威として敵視され続けねばならない。そしてこの理由は彼がこの種の制度における正統性を持たないという事実と深く関連している。

物語内で繰り返し言及されているように，Jefferson にとっての Sutpen は過去を持たない，あるいはそれを明かさない人物である。そして“Sutpen himself is a master-plotter. . . .Yet his repeated attempts to found a [white] genealogy do not work, no doubt because one cannot postulate the authority and outcome of a genealogy from its origin.”(259)という Peter Brooks の指摘に暗示されるように，Jefferson は，明確かつ正当な出自を持たない人物を決して許容しようとしない社会である。それゆえ，社会的に承認され得ない彼がいかに Jefferson の社会制度に則った白人種の家系を築こうとしても，最終的にそれが完遂されることはない。時の推移と共に没落してゆく Sutpen 荘園の運命は，Jefferson 自体に組み込まれたプログラムでもあるのだ。だがここで我々は，誰が，いかにしてそのような承認／権威付け(authorization)を行い得るかについても勘考しておくべきであろう。なぜならば，Pearce の言葉を借りれば，Sutpen 自身も *Absalom, Absalom!* という物語を語る「語り手達による一つの虚構 (a fiction)」(111)でしかないからだ。

物語を精読すれば，Sutpen を Jefferson の社会に巣くう悪鬼たらしめているのは他ならぬ語り手達，殊に Rosa であることが分かる。もちろんそれは彼の粗野で無礼な振る舞いに対する嫌悪感や，二人の間に生まれてくる子供が男児だったら正式に結婚しようという侮辱的な求婚に対する憤怒のせいでもあろうが，問題はそのような Rosa の言葉が Sutpen の異質性に善悪の価値観を付与するという点にある。彼女が描く Sutpen イコール悪鬼という図式は，彼女が生きる Jefferson が持つ他者排斥の論理を正当化し，そのイデオロギーの持つ差別構造を隠蔽する役割を果たす(Pearce 113-115, 118-120)。換言すれば，彼女を初めとする語り手達の言葉は，その共同体と結託して Sutpen を制度の敵へと言わば書き換えてゆくことで自己を善なる存在として正当化してゆくのだ。このことは，彼等白人達自身の社会的優位も実は同様の戦略によって偽装されているに過ぎないことを示唆している。

そもそも「支配階級である白人」とか「被支配者たるべき黒人 (あるいは他者)」といったものには，何の根拠もありはしない。今ここで黒人差別の歴史を逐一見る余裕はないが，一つ言えるのはそれは間違いなく支配者である白人によって作り上げられた制度だということである。そしてこの制度は，究極的には言葉そのものによって編み出されるものである。幼い Sutpen にとってそうであったように，人種の区別とはそれ自体では純粋な差異でしかなく，それを内包する社会をその記号的特質によって切り分けているにすぎない。だが，一度それがある価値を与えられ制度化されるや否や，それはあたかも社会を構成するために不可欠で，しかも社会それ自体に先行して存在していた先験的な普遍的原理であるかのごとく考えられるようになる。そしてこの制度自体も，ちょうどそれが Rosa 達の声を通じて Sutpen を悪鬼たらしめるのに成

功したように，物語の語り手達，すなわち南部白人達によって物語の中で繰り返し追認されることによってのみ正当と目され得るのである。したがって *Absalom, Absalom!* におけるこの制度の有効性は，Sutpen が実際に生きた時代にアメリカ南部においてそれが実際に正当と見なされていたからというよりはむしろ，語り手達の語りの中で正当化される過程によっているのである。正しくはそれは捏造されたというべきか。なぜなら，我々は *Absalom, Absalom!* の中にその権威の起源を探ることはできないからだ。そして，もしこの制度がそのような虚構に依拠しているのであれば，その暴露と共に自らの崩壊をも露呈することになるだろう。次節以降では，*Absalom, Absalom!* においてこの種の制度を内包する南部社会が，その制度自身が孕む矛盾によっていかに瓦解してゆくかを見てゆきたい。

III

前述のように，南部白人社会の安定性がただその中に住む語り手達の語りによってのみ保たれているのであれば，その社会にとって異質な存在が顕在化することは，自己の崩壊の危機を意味する。そのような危機的瞬間は，*Absalom, Absalom!* においては，常にそこに内包された人種差別という制度の形を取って表出してくることとなる。以下ではこのような社会において人種的異質性がもたらす問題について見てゆくこととなるが，まずはその最初の段階として Sutpen 一族におけるこの問題から考察を始めたい。

前節冒頭でも触れたが，Jefferson の社会に参入してくる Sutpen が上記のような異質性を体現していることは明らかである。彼は Jefferson の住人にとってある種の両面価値性を持っている。寺沢によれば，彼は一方では「南部の敵，『あるべき正しい世界の敵』・・・[その世界を]意図的に滅ぼそうとする絶大な悪意の権化」(253) であると共に，他方では「旧南部の繁栄と共に繁栄し，その衰退と共に衰退する旧南部世界の一員——他者によって滅びをもたらされる者——」(254) である。この指摘から窺えるように，Sutpen は，まさに自らが Jefferson に持ち込んだ自身の異質性によって，彼を取り巻く社会制度と共に滅んでゆくことを運命づけられている。そしてそれは彼のみならず，彼の子供達の世代を通じて遂行される。

ここで確認しておきたいのは，Sutpen 自身は最後まで Jefferson の社会に同化することなき「異質な」存在だということであり，上記の寺沢の言葉はそれを指示している。これに対して，Tobin が述べているように，彼の子供達，殊にその白人の嗣子 Henry Sutpen やその妹 Judith などは，たとえ物質的な側面にせよ南部の社会に同化せんと努めている (83)。ここに Sutpen 一族の悲劇は端を発している。なぜならば，このよう努めて南部社会の一員たろうとする彼等は，逆にその試みの中で彼等自身が否応無く父 Sutpen から受け継いだ「異質さ」という identity を放棄し，あえて南部白人たらんと努めなければならないからだ。まずはここで，彼等が父同様南部社会にとって一種の strangers と認識されていることを確認しておきたい。

例えば，彼等兄妹を“*the two accursed children on whom the first blow of their devil's heritage had but that moment fallen*”（108）と形容するRosaからして，彼等が父Thomas Sutpenの属性を受け継いだ「呪われた子供達」であることを看破している。同じく彼女が語る，Sutpenがかつて度々楽しんでいた黒人奴隷との格闘を眺める二人のSutpen家の娘達，白人のJudithと彼が黒人奴隷に産ませた子Clytieの様子にも，彼女達Jeffersonの住民には容認し難いSutpen家一族の特徴が窺える。

> 'Judith!' she [Ellen] called in a voice calm and sweet and filled with despair: 'Judith-honey! Time to come to bed.'
>
> "But I was not there. I was not there to see *the two Sutpen faces* this time—once on Judith and once on the negro girl beside her—looking down through the square entrance to the loft." (21-22, my emphasis)

Rosaには，残酷な格闘を眺める二人のSutpen家の娘達の姿は，Sutpen家独特の忌まわしさを体現するかのように映っている。実はこの場面そのものが，Sutpenとその血筋を嫌悪するRosaの歪んだ妄想の産物に過ぎないが，同時にそれはSutpen一族の異質性，特にJeffersonの社会規範に忠実に生きてきた彼女にとって，ひいては南部社会全般にとってのSutpen一族の異質性を象徴的に表してもいる。しかしながら，上の引用においてClytieの存在に暗示されるように，ここでもう一度*Absalom, Absalom!*におけるこの種の異質性は結局のところ人種問題との密接な関係の中に顕在化してくることを確認しておかねばならない。

先の引用に窺えるように，南部社会にとってSutpen一族は皆等しくその家族的異質性を共有するものとされている。したがって彼等に体現されるこの異質性は，一方では個人を越えた不変かつ普遍的な属性として認識される。だが他方では，彼女が正に黒人であるがゆえに白人達から否応無く付与される野蛮さや野生のために彼等Sutpen一族の中でも一段と異質な存在となっており，またそれゆえ彼等自身の中でさえある種の潜在的脅威となっていることも明らかになるのである。長くなるが，このことを例示するために以下の引用を挙げておきたい。

> *Clytie, not inept, anything but inept: perverse inscrutable and paradox: free, yet incapable of freedom who had never once called herself a slave, holding fidelity to none like the indolent and solitary wolf or bear (yes, wild: half untamed black, half Sutpen blood: and if 'untamed' be synonymous with 'wild', then 'Sutpen' is the silent unsleeping viciousness of the tamer's lash) whose false seeming holds it docile to fear's hand but which is not, which if this fidelity, fidelity only to the prime fixed principle of its own savageness;—Clytie who in the very pigmentation of her flesh represented that debacle which had brought Judith and me to what we were and which had made of her (Clytie) that which she declined to be just as she had declined to be that from which its purpose had been to emancipate her, as*

though presiding aloof upon the new, she delibarately remained to represent us the threatful portent of the old. (126)

南部社会にとって異質な存在であるSutpen一族の中にあってさらに彼等自身に対しても異質であるのが，Clytie達黒人種なのである。それゆえ*Absalom, Absalom!*では，彼等Sutpenの血を引く黒人は，まず彼等がSutpen一族であることによって，さらに南部自体にとっての悪と滅びを体現する黒人の血を以てその一族，ひいては南部白人社会の存続を脅かすために，二重に異質でもあり，脅威的でもあるとされるのである。

ところが，*Absalom, Absalom!*における女性や黒人，あるいは南部社会の貴族的社会の外にあるSutpen家の使用人Wash Jonesのような貧乏白人は，物語の語り手であり主人公でもある他の白人達と比較すると，彼等の立場はあらゆる側面において一見極めて弱い存在でしかない。それは例えば，彼等の声が白人社会においては殆ど無視されるほどのものでしかないという点に反映されている。既に挙げた例の中では，Rosaの回想の中にでてくる，Judithをベッドに連れ戻そうとしてできないEllenの「絶望に満ちた声」が女性の無力さを示唆しているが，例えば同様にClytieにとってもその声は白人達に対して無力である。Sutpenの息子Henryが異母兄Charles Bonを射殺して逃亡した後，Clytieはその遺体が安置されている部屋へ向かって突き進むRosaを阻止しようと彼女の前に立ちはだかるが，しかし“*Dont you go up there, Rosa.*”(111)と呼びかけるその声はすぐさまJudithのひと声によって無力化されてしまう。南部社会において，彼女達の言葉が何らかの実際的効力を持つことはあり得ない。

このように社会的に無力な存在に許された唯一の実効力は実際的行動である。例えば，物語の結末近く，長い逃亡生活の末荒れ果てたSutpen's Hundredに潜む老いたHenryの元へRosaとQuentinが赴く時，彼等の目的がHenryの逮捕であると思ったClytieは，絶望の余り自ら屋敷に火を掛ける。この火はJim Bond一人を除いてSutpen一族を絶えさせる事になるのだが，彼女が物語においてこの一族に加えた唯一の実際的力はこの放火であり，このような無言の行動のみがRosaや他の白人達を圧倒し得るClytieの力なのだ(3)。

今ここでDonaldsonの意見を援用すれば，Clytieに代表される被抑圧的な女性の登場人物は，一見沈黙を強いられている様に見えつつ，語り手達の織り成す物語の構築を自らの沈黙によって阻もうとしており，その意味においてこの物語の中心をなすとされるSutpenを常に脅かし続ける存在である。さらに言えば，Henryを殺してSutpen家の白人の家系を絶えさせる点において，また同時にそうすることでBon殺害にまつわるSutpen家の歴史の秘密が語られるのを妨げるという点において，Clytieは二重の意味で*Absalom, Absalom!*において最も破壊的(subversive)な登場人物と考えられる。またこの意見に併せて，Washの孫娘Millyの産んだ女児がSutpen殺害の直接の原因となっている点等を指摘しつつ，Wadlingtonは，Sutpenとその一族を滅ぼすのはこれらSutpenの娘達であると述べている(180)。

これらの意見はいずれも，Sutpen一族に破局をもたらすのが，一方では社会制度に裏打ちさ

れた力としての言葉を持ち得ない彼等被抑圧的存在であることを示唆している。そしてその力は，先に述べたSutpen一族の内包する異質性を人種的差異という形で顕在化させる時，最も効果的なものとなるのである。ここではその最も顕著な例として，SutpenがHaitiで結婚したoctroonの妻と彼との子供であるCharles Bonを採り上げてみたい。

確認しておけば，Sutpenとその最初の妻であるoctroonの女性との離婚の理由は彼女が白人でなかったために，白人純血種の家系を築くという彼の計画にそぐわなかったことなのだが，その息子であるCharles BonがSutpen達の前に現れる時からSutpen一家の悲劇的没落が始まることとなる。彼はHenryの助力によってJudithと婚約することとなるのだが，この婚約を通じて顕在化するのは，既に言及したように，Sutpen一家の白人の子供達が同化しようと努めている白人中心主義の南部の社会的制度と，その基盤である白人の人種的純粋さを危機に陥れる黒人の血との相克の図式である。そしてこの没落の原因となるCharlesもClytie同様，その身体に流れる父母の血によって南部社会とSutpen一族の両方に対する二重の異質さが付与されていることも見逃してはならない。

前述のように，南部社会におけるSutpen一族の異質性は，常に人種問題と関連して表出してくる。この意味において，黒人の父を受け継ぎ，しかもその事実をかくしたままSutpen一族に参入して来るCharlesは，そのまま彼等一族と南部社会との関係を表象している。この時彼の中に潜在する破壊的な異質さは，その本質においてSutpenがかつてJeffersonに持ち込んだものと同一視できる。だが前節で見たように，今や南部白人社会の制度に自らを適合させることであえて「支配階級である白人」たることを選んだSutpen及びその(白人純血の)子供達にとって，混血児ゆえにやはり異質な存在となるCharlesは，その異質さが暴露される時，人種的コンテクストにおいてSutpenがかつてJeffersonに対して与えたのと同様の「正統性の危機」をこの一族にもたらすことになるのだ。そして，この力がSutpen一族を超えてそのよって立つ規範である社会制度それ自体にも及んでゆく時，彼等もまたその属せんと欲した社会と共に滅んでゆく。この意味において彼等は，彼等が参入した社会における抑圧された者すべてに共通する「異質な存在」としてのidentityを否定し，あえて人種的特質に頼って自己規定を行おうためにかえって白人として黒人Charlesによって滅ぼされてしまうのである。

これまでに我々は，Sutpen一族に対して被抑圧者達，殊に黒人が持つ破壊的な力について考察してきた。それはSutpen一族が参与している白人社会の制度，彼等が保持せんと懸命になっている制度としての言葉に抗する沈黙の裏に潜む，自らの異質さをもって彼等を滅亡に導く力であった。今ここで沈黙もまた言葉の修辞的側面の一つであることに気付けば，それは*Absalom, Absalom!*において語られる言葉それ自体をも逆手にとってその基盤を揺さぶってゆくもう一つの修辞性と密かに結託しているように思えてくる。それは，彼等被抑圧者達の沈黙の声に代わってこの物語を綴る言葉，すなわち，Henry SutpenによるCharles Bon殺害の原因を推理しつつSutpen一族の神話的物語を読み解こうとする二人の語り手であるQuentinと

Shreveの対話の中に窺えるようだ。

Ⅳ

*Absalom, Absalom!*の後半部は，Jefferson出身のQuentinと，カナダ人であるShreveの二人の語り手達の対話からなる。彼等の語る物語は，Charles Bonの過去や没落したSutpen's Hundredの住民の姿等に触れつつ，やがて南北戦争に従軍し，その後再びSutpen家に戻るHenryと，彼の混血の異母兄であるCharlesとの二人が交わす会話へと収束してゆく。彼等が論じる問題は，二人にとっての妹であるJudithとCharlesとの婚約が破棄され，HenryがCharlesを射殺せざるを得なくなる理由である。例えばCompson氏によれば，それはCharlesも父Sutpen同様，Judith以前にNew Orleansで別の黒人女性と結婚していたのだが，その女性とJudithが同列に並べられることがHenryには耐えられなかったためである。だが実は，これはあくまで彼の推測の域を出ない。以下のCompson氏の言葉からそのことが窺える。

> It [the past]'s just incredible. It just does not explain. Or perhaps that's it: they dont explain and we are not supposed to know. We have a few old mouth-to-mouth tales; we exhume from old trunks and boxes and drawers letters without salutation or signature, in which men and women who once lived and breathed are now merely initials or nicknames out of some now incomprehensible affection which sound to us like Sanskrit or Chocktaw; . . . (80)

*Absalom, Absalom!*が我々に提示するのは，このような懐疑と憶測からなる絶え間ない解釈ゲームなのだ。そして，CharlesがHenryとJudithの二人の混血の異母兄であることが明らかになることで，ゲームのプレイヤーであるQuentinとShreveが追及する謎に対する回答に，黒白雑婚と近親相姦という新たな二つの可能性が明らかになる。それについて語る彼等は，次の引用に見られるように，今や生家を捨て南北戦争に従軍するHenryとCharlesにそれぞれ同一化したかのようである。"So that now it was not two but four of them riding the two horses through the dark over the frozen December ruts of that Christmas eve: four of them and then just two—Charles-Shreve and Quentin-Henry, . . ." (267)

Quentin-HenryとShreve-Charlesの重層化した関係の背後には，南部白人社会と，その社会にとっての部外者として排斥されたり抑圧されたりしている存在との対立構造が隠されている。前節でも見たように，この対立の中で前者に属するものはやがてそれが抑圧し続けてきた者達によって無力化されるのだが(Duvall 106)，QuentinとShreveの対話の中ではそれは彼等が展開する解釈ゲームを通じて修辞的レヴェルでシミュレイトされる。以下ではこのことを確認するが，そのためにここで彼等が体現するものが何かを見ておこう。まずはQuentinについてであるが，それは次の引用に窺える。

> It was a part of his twenty years' heritage of breathing the same air and hearing his father talk about the man [Sutpen]; a sort of the town's—Jefferson's—eighty years' heritage of the same air which the man himself had breathed between this September afternoon in 1909 and that Sunday morning in June in 1833 . . . Quentin had grown up with that; the mere names were interchangeable and almost myriad. His childhood was full of them; his very body was an empty hall echoing with sonorous defeated names; he was not a being, an entity, he was a commonwealth. (7)

Quentin は言わば彼が育った Jefferson の過去の集積である。そして前述のように，この Jefferson がアメリカ南部を表象しており，さらに白人優越が制度としてその社会に根付いているならば，Quentin は Henry の言葉を借りつつ，彼を通じて自らのイデオロギーを提示する南部社会の代弁者たる役割を担っていることになる。

一方 Shreve の役割はどうであろうか。ここで注意しておきたいのは，彼はカナダ人であるがゆえにこの南部社会が標榜するイデオロギーの外に存在しているということである。Creanth Brooks が言うように，彼は Quentin との対話においてその物語に実際に取り込まれてしまうことはなく，それゆえ南部性の意義を真面目に把握することもない(204-05)。しかし，だからこそ同じく南部社会にとっての部外者である Charles に同化し得るのである。そして Quentin との解釈ゲームを通じて，彼も Charles 同様，南部のとっての他者としてその社会の中へ侵入してゆく。言うまでもないが，このゲームが成立するためには参加者に共通の規則が必要とされる。この場合その規則は南部の社会制度という過去の遺産それ自体であるのだが（Radloff 262-63)，この規則が内包する欺瞞が Quentin-Henry の側を敗北へ導いてゆくことになる。

物語の終盤近く，Shreve と Quentin の対話は戦場の Charles と Henry のそれをなぞってゆく。ここでまず問題となるのは，Charles と Judith の近親相姦がいかに容認され得るかである。だが，「もはや誇りも名誉も，4年前神が彼等を見放して以来神も無く，ただ神はそれを告げる必要が無いと考えたに過ぎない」(283) 南部人にとって，それが彼等の血の純潔を保つ唯一の手段である以上肯定され得る（寺沢 297-303）と考える Henry にとっては，実際にその結婚の障害となるのは Charles の身体にわずかに流れる黒人の血である。Quentin と Shreve は，その禁忌のために苦悩する Henry と Charles Bon の対話をなぞってゆく。

> —*So it's the miscegenation, not the incest, which you cant bear.*
>
> *Henry doesn't answer. . . .*
>
> —*I* [Bon] *cannot* [marry Judith] ?
>
> —*You shall not. . . .*
>
> —*Then do it* [to shoot Bon] *now, he* [Bon] *says. . . .*
>
> —*You are my brother.*

—*No I'm not. I'm the nigger that's going to sleep with your sister. Unless you stop me, Henry.* (285-86)

異人種雑婚が当時の南部社会にとってタブーだったにも拘らず，Henry は兄 Charles 殺害を躊躇せざるを得ない。このような Henry とは対照的に，雑婚禁忌の正当性を積極的に承認するのはむしろ Shreve-Charles の側であることは注目に値する。なぜなら彼等のこの態度は，雑婚禁忌を正当化する南部の社会制度の欺瞞を適確に指摘しているからである。前述のように，この制度が Shreve と Quentin の行う解釈ゲームを統べる規則であり，このゲームの中で Quentin が南部の代弁者たる役割を与えられているのなら，Henry をして雑婚を否定し得るのは彼の側でなくてはならない。だがこの規則に忠実に従って雑婚禁忌の正当性を指摘するのが，本来その制度の外に置かれるべき異邦人／異人種である Shreve-Charles であるのに対し，南部白人である Quentin-Henry は，この規則に支持される存在であるにも拘わらず "*So it's the miscegenation, not the incest, which you cant bear.*" という問いに対する満足な回答をなし得ない。ここで問題なのは，彼等にとってこの問が回答不能だという点である。

前節までで見てきたように，南部社会を統括する白人優越の制度はそれ自体虚構であり，それゆえ絶えず語り手達による正当化を必要とし，同時にその正統性を保証するとされる白人純血種の系統は常に黒人達の存在によって脅かされている。そして今この系譜を存続するために許される手段が近親相姦でしかなく，しかもそれが同時にその正統性を黒人の血の導入によって失わざるを得ないという二重拘束に捕らわれているならば，その結果は常に白人優越を保証する純血性の喪失でしかない。彼にとって，そしてもちろん Sutpen 一族の白人全員にとっても，自らが属する社会に対する正統性を放棄することなしにその家系を存続することはもはや不可能であり(4)，それゆえ彼は満足な答えを見出せないのだ。

今再びこの語りを Quentin と Shreve による解釈ゲームと見れば，Charles-Shreve の語りは，このように南部社会を構成する制度に一見忠実に従っているかのように見えつつ，Henry-Quentin を解決不能な袋小路に追い込んでゆく。この前者の声は，後者のそれとは明らかに異質なものとして，Ross が言うところのテクストの多声的側面の強化(79-80)の機能を果たし，一見一枚岩的な制度によって構成されているかに見える南部社会の代弁者たる Quentin- Henry に回答不能の問を投げかけることでその制度が内包するディレンマを浮き彫りにしてゆく。そしてここで Quentin-Henry の役割を鑑みれば，このディレンマは彼等南部白人が属する社会自体のそれであると考えられる。この社会が Quentin と Shreve を通じて演じた腹話術は，結局のところ自らが依拠する制度が規定した黒白雑婚禁忌がもはや何の意味もなさないばかりか，図らずも自身の正統性を否定する機能をも果たすことを暴露してしまうのだ。

このような事態を打破するために南部白人の側が採った手段は，Clytie 同様実際的な暴力の行使である。Henry は南北戦争から Sutpen's Hundred に戻った時点で Charles を射殺する。つまり，Quentin-Henry にとって解決不能な問題を片付ける唯一の方法は，その根源である

Bon を実際に消し去ることであらゆる問いを封じ込め，またそれらに対して口を閉ざすことなのだ。したがって Henry はその後いずこともなく逃げ去り，同時に Quentin の語りも Henry の遁走をもって途切れる。だが，これこそが彼等の完璧な敗北の瞬間なのだ。ここにおいて，前節で見た「語り得る白人」と「沈黙した黒人（被抑圧者）」という関係は完全に逆転している。今や南部社会に属する白人達に許されるのは沈黙のみである。彼等はもはや言葉を持ち得ないのだ。

しかも物語はここで終わらない。崩れゆく Sutpen 邸に響く Charles Bon の末裔である黒人 Jim Bond の嘲い声に話が及ぶ時，Shreve はこう語る。

> I think that in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemishpere. Of course it wont quite be in our time and of course as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits and the birds do, so they wont show up so sharp against the snow. But it will still be Jim Bond; and so in a few thousand years, I who regard you will also will have sprung from the loins of African kings. (302)

Shreve が予言するのは，南部の白人優越主義が前提とする「純粋な白人種」の消失である。白人 Sutpen の血は Clytie によって途絶えたが，黒人 Charles のそれは Jim Bond に引き継がれる。それは物語の内部に生き残り，南部社会における白人の人種的純粋さを永遠に脅かし続ける存在となる。物語世界内に Jim Bond が生き残っている限りこの予言を否定することは不可能である。もはや南部社会は自らが立脚する基盤を，黒人の血の存在と拡散によって失ってゆくことしか許されないのだ。ここに我々は南部社会を支えて来た白人優越主義の敗北を見る。このイデオロギーに依拠して生きてきた Quentin 達南部白人は，今や彼が属する社会の外から響いてくる，Shreve と彼がその背後に抱える抑圧されし者達の前に，再び沈黙を強いられるのだ。

今や南部社会における抑圧者側と被抑圧者側との関係は完全に逆転している。この社会にとって部外者である Shreve-Charles は，Clytie に代表される実際的な破壊力と結託し，Quentin-Henry との解釈ゲームを通じて南部白人社会に修辞的闘争を仕掛け，その中で自らの異質なる者としての属性を発揮して，南部のイデオロギーを築き，守ってゆくための武器である言葉をも奪ってゆく。そしてそれに代わって今度は彼等の方が，沈黙した南部社会に対して自らの優位を宣言し始めるのだ。以上から，南部社会の制度が，言葉によって築かれ，また言葉によって解体される虚構に過ぎず，それゆえその中に住む白人の正統性も同様の虚構に過ぎないと結論付けることができるであろう。

V

*Absalom, Absalom!*は，イデオロギーが持つ修辞的欺瞞性を，同じく修辞の力をもって暴露する小説である。そこでは社会制度とは言葉によって築かれた虚偽の権力構造でしかなく，正にそのために自らが言葉によって転倒される運命にある。言葉の力によってのみその社会制度を存続させてきた南部の白人社会は，一方ではその中に潜み続けてきた，抑圧された沈黙の存在が行使する実際的な力の反乱に遭う。他方では，その彼等の存在は修辞的レヴェルにおいても効力を持つ。それはShreveとQuentinの間で交わされる言語ゲームを通じて既存の制度を解体してゆく。ここに我々はアメリカ南部の白人優位が覆されて行く過程を見る。それは自らの虚偽性のために崩壊を運命づけられている。それゆえこの中に身を委ねる存在は，その制度そのものに裏切られ，滅亡する。このことは，この小説の舞台である南北戦争後のアメリカ南部社会においては，それを形成してきた制度が，そこに生きる者達の依拠し得る権威を喪失したことを意味する。だが，南北戦争を経てなおこの制度の幻想の中に住み続ける者にとっては，そのような南部はもはや南部ではない。それはもはや悪夢でしかない。過去の幻影こそが彼の認識し得る南部なのだ。それゆえ，彼は書き換えられてゆく過去の歴史を認めることはおろか，おそらくは自らがそれを恐怖していることすら自覚し得ないであろう。物語の最後のShreveの問“Why do you hate the South?”(303)は，このような現実を否定しようとするQuentin＝南部白人社会の姿を指摘している[5]。この小説が午後のひとときに始まり，凍る様な真夜中で終わっていることは多分に暗示的である。“*I dont hate it!*”(303)と最後まで叫び続けるQuentinは，永遠に覚めない悪夢の中にいるのだ。

注

(1) DonaldsonやDuvall(101-109)等によれば，*Absalom, Absalom!*では農場主－貧乏白人，白人－黒人，父－息子，男性－女性，夫－妻といった関係においては，常に前者が後者を抑圧する図式が見られるが，この関係はやがて後者によって転倒される事となる。彼等はこの転倒の図式を被抑圧者＝女性原理による支配的父権制=男性原理への抵抗と見做している。

(2) 寺沢は，Faulknerの小説作品における白人＝善，黒人＝悪のそれぞれの属性は南部社会が自己防衛のためにおのおのに振り分けた役割であると論じている。彼女によれば，南部社会は白人男性を社会構造の頂点に置き，それに対して女性，黒人，よそ者といった存在が「絶対的な階級差」と「決定的な意味」(19)をもってその下に階層化した社会であることを指摘し，このような階層化によって自己保身を図ることが，南北戦争の敗北によって自我の危機に見舞われた南部人には不可欠であったとしている(3-52, 227-309)。

(3) 同様の例として，Sutpen家の使用人である貧乏白人のWashにも触れておきたい。Sutpenは彼の孫娘Milly Jonesをして自分の子供を生ませるが，その子が女であり，彼の宿願であるSutpen家再興を託する嗣子足り得ない事を見てとるや，彼はMillyにこう告げる。'Well, Milly; too bad you're

not a mare too. Then I could give you a decent stall in the stable'(229)。この侮辱によってWashはSutpenを大鎌で殺害し自らも命を断つのだが，彼もClytie同様言葉ではなく実際的な力の行使によってしかSutpenに打ち勝ち得ない。

(4) この原因をQuentin-Henryの同性愛的近親相姦嗜好の中に見る批評家もいる。例えばHallはHenryによるBon殺害の動機を妹Judithに対する嫉妬であると言う。HenryはBonに対して一種の同性愛的感情を抱いており(Duvall 103)，その関係に割り込んできたJudithとの三角関係解消の手段がBon殺害であった(Hall 71-74)。ここにHenryの潜在的性的不能と，そこから予見されるSutpen家の白人の血統の断絶を窺うこともできるであろう。

(5) Wadlingtonによれば，Quentinが南部を嫌悪するのは，Jim Bondの存在に暗示される様に，そこが異人種混血の潜在的可能性を秘めているからである(185)。

引用文献

Brooks, Cleanth. *William Faulkner: First Encounters.* New Haven: Yale UP, 1983.

Brooks, Peter. "Incredulous Narration: *"Absalom,Absalom!"* *William Faulkner.* Ed. Harold Bloom. Modern Critical Views Ser. New York: Chelsea House, 1986. 247-68.

Donaldson, Susan V. "Subverting History: Women, Narrative and Patriarchy in *Absalom, Absalom!"* *Southern Quarterly: A Journal of the Arts in the South* 26. 5 (1988): 19-32.

Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities.* Austin: U of Texas P, 1990.

Faulkner, William. *Absalom, Absalom!* New York: Vintage, 1990.

Hall, Constance Hill. *Incest in Faulkner: A Metaphor for the Fall.* Ann Arbor: UMI research P, 1986.

Kuyk, Dirk Jr. *Sutpen's Design: Interpreting Faulkner's* Absalom, Absalom! Charlottesville: UP of Virginia, 1990.

Lockyer, Judith. *Ordered by Words: Language and Narration in the Novels of William Faulkner.* Carbondale: Southern Illinois UP, 1991.

Parker, Robert Dale. *Absalom, Absalom!: The Questioning of Fictions.* Twayne's Masterwork Studies 76. Boston: Twayne pub., 1991.

Pearce, Richard. *The Politics of Narration: James Joyce, William Faulkner, and Virginia Woolf.* New Brunswick: Rutgers UP, 1991.

Radloff, Bernhard. "Dialogue and Insight: The Priority of the Heritage in *Absalom, Absalom!"* *Mississippi Quarterly* 42. 3 (1989): 261-72.

Ross, Stephen M. "Oratory and the Dialogical in *Absalom, Absalom!"* *Intertextuality in Faulkner.* Ed. Michel Gresset and Noel Polk. Jackson: U of Mississippi P, 1985. 73-86.

寺沢みづほ.『民族強姦と処女膜幻想－日本近代・アメリカ南部・フォークナー』東京：御茶の水書房, 1992.

Tobin, Patricia. "The Time of Myth and History in *Absalom, Absalom!"* *On Faulkner.* Eds. Louis J. Budd, and Edwin H. Cady. The Best from American Literature Ser. Durham: Duke UP, 1989. 73-91.

Wadlington, Warwick. *Reading Faulknerian Tragedy.* Ithaca: Cornell UP, 1987.